

事業実績書

- 1 事業名 Circular Cotton Project
- 2 実施期間 令和 4年 4月28日～令和 5年 2月 28日

3 事業内容

① 事業の目的・概要

繊維産地で働く生産者が、ものづくりの本質、派生して起こる環境問題、社会問題などを深く理解し、同時に企業の垣根を越えて繋がり合うことで、産地規模で環境や人権に配慮した「持続的なものづくり」を実現させていく。

② 事業の流れ等

■SANCHI MEETING

企業や取引先の垣根を超えて、ひろくアパレル産業に関わる若手を集め、交流を主軸にしながらも、勉強会や擬似製品企画も行うことで、これからの産地を担う存在として、産地のものづくりを本質的に捉えられる人材を育てるため、SANCHI MEETING（産地ミーティング）を開催した。

【実施日】

- ・6-7月 産地若者会議告知（自主拡散/備中県民局を通じた広報）
- ・7/15(金) 5名参加：自己紹介および今後の説明
- ・7/29(金) 3名参加：自己紹介および今後の説明
(8/19(金) 新型コロナ感染のため中止)
- ・9/10(土) 8名参加：各参加者の取り組み紹介、リサイクルデニム製品企画会議
- ・10/10(月・祝) 4名参加：リサイクル製品開発、デニム裁断
- ・10/22(土) 8名参加：リサイクル製品開発、プロジェクト広報戦略、デニム裁断
- ・12/23(金) 6名参加：リサイクル製品開発、トークイベント講師選定
- ・1/27(金) 5名参加：トークイベント（ikajuM・河原氏）、1stサンプル修正
- ・2/10(土) 4名参加：2ndサンプル裁断体験、展示会内装イメージ出し
- ・2/17(金) 3名参加：トークイベント（造形構想・峯村氏）

※詳細は、別添資料①のとおり

■Remade in Japan

アパレルの環境や社会問題が叫ばれる昨今、国内産地からも「循環型のものづくり」を提案していく必要に迫られている。

このため、個々のブランドでリサイクルなどに取り組むにはハードルが高いが、産地企業が複数集まることで、そのハードルを下げ、共有できる資源循環の仕組みを生み出すことを目的とし、不要となった服（デニム）を回収し、生み出したリサイクル糸で製品化を行い、広く県民や関連企業にPRを行った。

参加ブランド：WHOVAL、THE EASY SHOP、ダンジョデニム、Ura studio、
land down under（5社）

回収場所：参加ブランドの全7店舗、催事での直接回収

選別・裁断場所：倉敷市児島田の口

【内容】

4-8月/参加ブランド声かけ、

9月/正式名称（Remade in Japan）決定、ロゴ製作

9-10月/デニム製品回収

10-11月/デニム製品選別・裁断

12-2月/リサイクルデニム製品開発

2/26（日） Remade in Japan EXHIBITION

会場：倉敷アイビースクエア アイビー学館（10：00～18：00）

内容：リサイクルデニム製品展示、プロジェクト取組紹介展示、5ブランド製品販売

※詳細は、別添資料②のとおり

③ 成果・効果

■SANCHI MEETING

- ・産地の将来を考える若者世代のコミュニティを設立し、定期的な会合を行う。
- ・産地若者会議および協賛企業で「合同お披露目会」を開催し、取り組み周知を行う。

評価指標・測定方法	数値目標		
	現状	今年度	実績
・産地若者会議参加者 参加者で製品製作	0人 0件	10名 1件	8名 1件
・お披露目会参加者	0人	50名	約500名
・アンケート (理解度3段階評価)	A判定0名	A判定5名以上	A判定6名

→参加メンバーは回を重ねるごとに親睦が深まり、リサイクルデニム製品開発を通して、互いの強み（専門知識）を教え合いながら、学びを深めた。

メンバーのなかには、本業で繊維製品開発を始めた者や、アパレル産業で独立を決めた者、運営しているブランド活動に学びを活かす者、個人活動としてアパレル製品を作り出す者が生まれ、意識変革に大きく寄与した。

リサイクルデニム製品開発を通して、循環型ものづくりについて考え、勉強会でサーキュラーエコノミーについて学びを深めたことで、これからの産地のものづくりの必要性を理解していった。

■Remade in Japan

- ・古着回収の仕組みを作る（回収拠点の設置など）。
- ・回収→リサイクル→製品化のサイクルを、協賛企業を巻き込んで実現する。
- ・産地若者会議にて製品化を行い、参加者が一連のものづくりを主体的に経験する機会を設けるとともに、地域PRにも活用する。

評価指標・測定方法	数値目標		
	現状	今年度	実績
・デニム回収拠点	0箇所	30箇所 →少数に修正	7箇所
・参加企業	0社	3社	5社
・CCP製品化	0件	4件	10件 (5ブランド)

→当初は参加ブランドの声がけに予想以上に苦戦したが、大規模～個人規模までのバリエーションに富んだ5ブランドが集まった。

デニム製品回収：

約90名・200着（ジーンズ、ジャケット、キッズなど種類は様々）

回収内訳：

20-30代男女、30-40代主婦層が中心

+縫製工場、裁断工場の生地端切れ

▶リサイクルデニム：450m（9反）、綿100%

▶リサイクルデニム製品：（計16アイテム）

- ・SANCHI MEETING/ジャンプスーツ（ツナギ）
- ・WHOVAL/ジャケット、パンツ、靴（2種）
- ・THE EASY SHOP/ジャケット、パンツ

- ・ダンジョデニム/ジャケット、トートバッグ
- ・Ura studio/バッグ(3種)、小物(3種)
- land down under/パンツ

▶来場者数：約 500 名（※約 50 名には、直接展示紹介を実施）

メディア掲載：毎日新聞、読売新聞、中国新聞、繊維ニュース、織研新聞
IDEAS FOR GOOD、Circular Economy Hub、Zenbird
RSK ラジオ、エフエムくらしき

メディアからの想定以上の反応があり、デニム製品回収が促進された。

参加ブランドの協力によって多くのアイテムが誕生し、リサイクルデニムがさまざまな形となってお披露目することができた。

環境や社会的意義はもちろんだが、取り組みとしての「面白さ」が広がり、反響があったことが一番の成果と言える。

④ 今後の課題・展開等

事業は、協働事業としてではない形で継続を検討する。

参加ブランドから参加費を回収し、自己資金で自走できるプロジェクトにする。

⑤ 県民局と協働した効果及び課題

備中地域の公的機関（自治体や商工会議所など）への周知が促進され、地域のラジオ出演などの機会をつくってもらい、PR 活動に繋がった。

県民局のつながりから、SANCHI MEETING に参加したメンバーもおり、協働することで、より多くの人を巻き込むことが可能となった。

初めての取り組み（回収～リサイクル）だったため、想定外のスケジュール変更が起きることもあり、年度内に完結させる協働事業として進めていくには困難も感じた。

4 参考事項・資料

- ・SANCHI MEETING 報告書（第1回～第9回）
- ・展示会資料
- ・各種チラシ（デニム回収募集チラシ、展示会開催チラシ）

2023.2.26(sun) “Remade in Japan” EXHIBITION

- 広報

ポスター・チラシ(参加ブランド店舗7店、備中県民局、児島商工会議所、倉敷アイビースクエア etc.)
SNS(参加ブランド各社)、ラジオ出演(2/10 RSK ラジオ、2/23 FM くらしき)

- 実績

参加ブランド：5 ブランド、SANCHI MEETING

リサイクルデニム製品：16 アイテム

DANJO DENIM：ジャケット、トートバッグ THE EASY SHOP：ジャケット、パンツ
LAND DOWN UNDER：パンツ URA STUDIO：バッグ3種、小物3種
WHOVAL：ジャケット、パンツ、靴2種 SANCHI MEETING：ジャンプスーツ

来場者数：約 500 名 (※約 50 名には、直接展示紹介を実施)

メディア：NHK、倉敷とことこ



入口



会場



展示 (リサイクル・プロセス)



展示



ブランドブース「land down under」



ブランドブース「WHOVAL」



ブランドブース「THE EASY SHOP」



ブランドブース「ダンジョデニム」



ブランドブース「Ura studio」



会場の様子



再
日
本
製
Remade in Japan

産地企業がつとい、共同でデニムを回収。こまかく裁断したのち、反毛〔はんもう〕と呼ばれるリサイクル技術で綿状に分解し、新品の綿と配合して糸を撚って生地を織る。デニム製品をつくり、再び街に帰します。好きだったけど着られなくなってしまった服が、生まれ変わって街をめぐる。そんなあたらしい体験を一緒にしてみませんか。

対象製品：綿(コットン)100%表記のあるデニム製品【ブランド・サイズ・数量不問】
“Remade in Japan” contact : ldu.japan@gmail.com

Entry Form

